

新たな地平をめざして



新国立劇場バレエ団、この秋始動！

New



New



David Bintley

Direction!

Question 1 デヴィッド・ Bintレーとは何者か？

Answer① 英国バーミンガム・ロイヤルバレエ芸術監督

Answer② 世界でも稀有な才能を持つ、英国が誇るロイヤルバレエ系譜の振付家

Answer③2010/2011 シーズンからの新国立劇場舞踊芸術監督

<プロフィール>

英国ハダースフィールド生まれ。

英国ロイヤルバレエ学校に入ったが、当時英国ロイヤルバレエでは、マーゴ・フォンティン、ルドルフ・ヌレエフ、アンソニー・ダウエルなど世界的なダンサーが活躍していた黄金時代であり、フレデリック・アシュトンやケネス・マクミランが最高傑作を生み出す同時代に居合わせていた。

1976 年サドラーズ・ウェルズ・バレエ(現バーミンガム・ロイヤルバレエ)に入団し、瞬く間に秀逸なキャラクター・ダンサーとしての頭角を現した。アシュトン振付の「ラ・フィユ・マル・ガルデ」のアランやシモーン、「真夏の夜の夢」のボトム、「シンデレラ」の意地悪な姉などを演じている。入団後 2 年も経ずにプロとしてサドラーズ・ウェルズ・バレエのために「アウトサイダー」を振り付けた。この作品には既に人物への鋭い洞察、知的で刺激的な音楽の選択など Bintレーの資質が現れていたが、ここではジョージ・バランシンなどのアメリカの影響とアシュトン、チューダー、マクミランなどのイギリスの伝統的系譜がともに見て取れる。

1982 年に 3 ヶ月間アメリカとドイツのダンスシーンを視察、この経験は間違いなく Bintレーのイマジネーションを拡げ、Bintレーが持っていたイギリス的アプローチの本質に確信を与えることになった。

1986 年から 93 年の間、サドラーズ・ウェルズ・バレエや英国ロイヤルバレエの振付家として活躍。1993 年にフリーランスになった時には世界中の 7 カンパニーから新制作依頼が殺到した。

ピーター・ライトを引き継いで 1995 年からバーミンガム・ロイヤルバレエ芸術監督。Bintレーの見事な振付はアシュトンやマクミランの継承者にふさわしいものである。

2001 年 CBE(大英帝国勲章)受勲。2009 年に振付けた「E=mc²」(バーミンガム・ロイヤルバレエで世界初演)が、South Bank Show Award を 2010 年 1 月に受賞、また同時に英国の権威ある賞、「ローレンス・オリヴィエ賞ベスト新作ダンス部門」にもノミネートされた。

2008 年 9 月 1 日より新国立劇場舞踊芸術参与(次期芸術監督予定者)。2010 年 9 月より新国立劇場舞踊芸術監督に就任(バーミンガム・ロイヤルバレエ芸術監督と兼任)。2005 年新国立劇場で「カルミナ・ブラーナ」、2008 年 11 月に新国立劇場新制作「アラジン」が上演され高い評価を得た。



▲デヴィッド・ Bintレー CBE

<プロフィール>

新国立劇場バレエ団

1997年新国立劇場の開場とともに活動を開始。芸術監督には開場当初の島田廣に引き続き、99年より牧阿佐美が就任、国内外の振付家、デザイナーなどと連携し、海外ダンサーも加え多彩な舞台創りを続ける。オーディションで選ばれた才能豊かなダンサーを核として、これまで上演した作品は「眠れる森の美女」「くるみ割り人形」「白鳥の湖」「ジゼル」「ドン・キホーテ」などの古典作品や「シンデレラ」（アシュトン振付）、「ロメオとジュリエット」「マノン」（マクミラン振付）「ライモンダ」（プティパ振付、牧阿佐美改訂振付）「カルミナ・ブラーナ」（ビントレー振付）、「アラジン」（ビントレー振付）、「アンナ・カレーニナ」（エイフマン振付）などレパートリーは日本を含む8カ国の振付家による42演目を数える。近年バレエ団としての総合力が高く評価され、04年には「ライモンダ」で朝日舞台芸術賞をバレエ団として受賞。牧芸術監督は06年に完全オリジナル振付作品の「椿姫」で同舞台芸術賞を受賞。08年には米国ケネディ・センターにおいて海外デビューを果たし高い評価をえ、翌09年にはモスクワ・ボリショイ劇場に招待され「椿姫」を上演し大きな成功を収めた。テクニック、表現力、精神力を兼ね備えた名実ともに国立の名に値する国際レベルのバレエ団に成長している。シーズンを通して出演する契約ダンサー69人、演目によって出演する登録ダンサー26名、総勢95名のバレエ団。2010年9月より、デヴィッド・ビントレーが芸術監督に就任（英国バーミンガム・ロイヤルバレエ芸術監督と兼任）。

Question 2 新国立劇場の芸術監督として何をするのか？

Answer① 英国での経験を活かし、日本の舞台芸術のさらなる発展に尽力する

Answer② 牧芸術監督を引き継ぎ、バレエ団を新たな地平へ

Answer③ バレエをエンターテインメントとして一層楽しんで頂き、身近に感じてもらう

劇場は、今まさにこの時代に生きているものなのです

～ David Bintley

次期芸術監督に就任することが 2008 年に発表されてから、 Bintley は新国立劇場芸術参与として、あるいは振付家として度々来日、2010/2011 シーズンの準備を進めつつ、積極的、精力的に活動しています。

その中で Bintley がインタビュー、記者会見、あるいはお客様向けトークイベントなどで、繰り返し語っているのは、バレエへの深い「愛情」と、英国ロイヤルの系譜にあって培われた卓越した見識に基づく「劇場と舞台芸術のあるべき姿勢・社会的役割」、バーミンガム・ロイヤルバレエで芸術監督として大きな成功を収めている実績を背景とした「バレエ団の目指すべき方向」についてです。

彼は「劇場は、今まさにこの時代に生きているものなのです。そしてこれからも、時代とともに生き続けるべきだと思います。

▼2010 年 1 月「2010/2011 シーズン・ラインアップ」発表



2010年1月の「ラインアップ」発表時には、自らのラインアップの説明に加え、世界的にひっ迫にした経済状況のことにも言及し、「たいへんに厳しい時代ではありますが、こういう時代にこそ、人々は心の滋養をより一層求めるものです。英国では大戦中に多くの人たちが、食糧配給の列に並ぶのではなく、劇場の入口に列を成したことがありました。社会や世界経済が不透明である時こそ、人々に心の栄養を与える劇場への予算が徐々に、あるいは劇的に減ったりしないことを望んでいます」と話した。

Reach the public お客様とより近く ~ David Bintley

▼2010年1月「お客様向けラインアップ説明会」開催



2010年1月「お客様向けラインアップ」説明会を開催。その中でビントレーは「たとえば「白鳥の湖」や「眠れる森の美女」はロシアのバレエ団が素晴らしいステージを見せます。なぜならそれらの作品はロシアのダンサーのために創られた作品だからです。同じように「アラジン」は新国立劇場バレエ団のダンサーが世界一素晴らしく踊ります。なぜなら、この作品は彼らのために創られた作品だからです。これからの新国立劇場バレエ団に必要なのは彼らのための作品です」また、日本人ダンサーの資質に対する質問には「優れた才能を持つ日本人ダンサーたちが世界中で活躍しています。今や日本にも新国立劇場バレエ団があるのですから、日本が育んだ素晴らしいダンサーたちを日本のお客様に見ていただくためにも、そうした才能の海外流出を食い止めることも必要ではないでしょうか」と語った。

▼2010年5月「カルミナ・ブラーナ」公演直前、劇場開場以来初のお客様向け公開リハーサル実施



2010年5月「カルミナ・ブラーナ」のリハーサル時には、お客様により身近にバレエを感じてもらいたいとの願いから、新国立劇場開場以来初の「お客様向け公開リハーサル」を実施。折しもアイスランドの火山噴火の影響で来日予定が遅れ、公開リハーサル当日に成田着、空港からリハーサル室へ直行となった。長旅の疲れも見せず、リハーサル指導にあたった。公開リハの後はトークイベントも開催され、お客様からもたくさんの質問やコメントが飛び交い、大盛況となった。

▼2010年5月「カルミナ・ブラーナ」公演終了後に連日アフタートーク・イベントも

5月に5年ぶりの再演となった「カルミナ・ブラーナ」公演終了後、アフタートーク・イベントも開催、多くのお客様との直接的なコミュニケーションが実現した。お客様から「日本人のダンサーに足りないものは？」との質問に「多くの優れた日本人ダンサーが世界中で活躍しています。確かにバレエは多くのことをダンサーに要求します。手脚の長さ、音楽性、身体能力 etc、僕が最も重視するのは才能の輝きがあるかどうかです。新国立劇場バレエ団のダンサーたちにはそれがあります。もしそうでなければ、僕はここにいません」と答え、満場の喝采を浴びた。



<ビントレーと新国立劇場バレエ団の出会い>

～運命の女神は「カルミナ・ブラーナ」～

遡ること5年前、2005年「カルミナ・ブラーナ」の上演が、デヴィッド・ビントレーとバレエ団の運命的な出会いとなりました。

2005/2006 シーズンの開幕公演にビントレー振付の当作品を新国立劇場が上演、そのステージは日本の観客に大きな衝撃と感動を与えました。公演は大成功、バレエ団が1つのステップを駆け上がった瞬間でもありました。

ビントレーは当時を振り返り、「熱心で意欲的なダンサーたち、優秀なスタッフ、素晴らしい劇場・・・「カルミナ・ブラーナ」のために日本に滞在した日々は、僕にとっては何もかもが素晴らしい経験でした」と後に語っています。

▼「カルミナ・ブラーナ」初演リハーサル2005年



初演時「カルミナ・ブラーナ」のブレーク・イベント。多くのお客様が詰め掛けた。登壇者には故・若杉弘氏も(当時新国立劇場オペラ芸術参与)

公演直前のリハーサルで来日したビントレーからバレエ団全員に「ビントレー直筆イラスト付きckパンツ」(当作品主役の神学生3が履いているものと同じ色形のパンツ)がプレゼントされたことも、いかにバレエ団ダンサーとビントレーの間に親密な信頼関係が築かれていたかを物語るほほえましいエピソード。



▲2005年初演「カルミナ・ブラーナ」撮影:瀬戸秀美

～新国立劇場バレエ団のために振付けた「アラジン」公演直前に 2010/2011 からの芸術監督就任の発表、

ランプの精・ジーンが願いを叶えたか？～

その後、新国立劇場がビントレーに全幕新制作を依頼、ビントレーが新国立劇場バレエ団のために「アラジン」を振り付け、2008 年晩秋世界初演されました。公演全日の主役を新国立劇場バレエ団ダンサーでキャスティングした初の全幕公演で、公演は大きな成功を収めました。

ビントレーはこの時のことを振り返り「僕にとって、この新制作はカルミナの時の10倍以上楽しい経験でした。ダンサーたちが難しい課題を克服しながら目の前で成長していく姿を見るのは実に感動的でした。彼らも、新しい作品と一緒に創り上げていく喜びを感じてくれたようです。食欲にそして真摯に全てを吸収しようとする姿勢は僕にとってもたいへん好ましいものでした」と語っています

そして、2008年6月、ビントレーが2010/2011シーズンから芸術監督に就任する予定であることが内外に発表されたのでした。(バーミンガム・ロイヤルバレエ芸術監督と兼任)

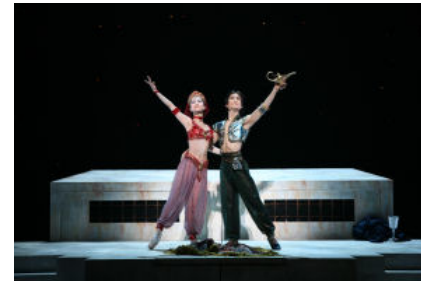
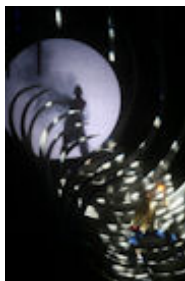
新国立劇場の舞踊芸術監督を引き受けた理由のひとつとして「正直これまで、世界の多くのバレエ団から芸術監督に就任してほしいという依頼がありましたが、全てお断りしてきました。新国立劇場からのオファーは思いもかけないことでしたが、にもかかわらず今回この依頼を受けた理由は新国立劇場バレエ団のダンサーたちがとても好きだからということが大きいと思います。このバレエ団の特徴でもある繊細さや清潔感、さらにはこのバレエ団はダンサーたちがお互いを気遣う大きな家族のように暖かな雰囲気のととても素敵なカンパニーで、そうしたバレエ団は世界にも多くありません」と話しています。



世界初演「アラジン」のリハーサル時、全ての役の振付を自分で踊ってみせて、ダンサーとともに作品を創り上げていった。プリンセス役のダンサー曰く「ビントレーさんが踊ったプリンセスは私より可愛かった…」

2010 年2月下旬、バーミンガム・ロイヤルバレエによる恒例のイベント「音楽とダンスのタベ」がバーミンガム・シンフォニー・ホールで開催され、「アラジン」が抜粋上演された。写真は新国立劇場公演

撮影：瀬戸秀美



David



& Male dancers

David & Female dancers

Miwa

Mamiko

Maki

Miho

David

Ayako

Mayumi

LET



Question 3 具体的にはどのようなことをするのか？

Answer① バレエ団をさらに高いレベルへ＝ダンサーの才能を一層活用する
様々な作品に出会い、多くのステージを踏むことでアーティストとしての
ダンサーの才能は開花します

～ David Bintley

ビントレー新芸術監督初シーズンは、トリプル・ビル公演(3つの作品が1つの公演に組み込まれている演目)2本予定されています。(2010年10月のオペラ劇場公演と2011年3月の中劇場公演)こうした公演の場合、ダンサーはより多くの役、パートを演じる好機が与えられることで今まで未知であった才能や個性が開花する可能性があり、この経験がダンサーを成長させるとビントレーは述べています。

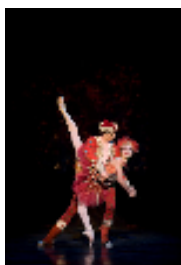
▼「ペンギン・カフェ」

▼「火の鳥」

▼「シンフォニー・イン・C」

Photo by Bill Cooper

撮影:瀬戸秀美



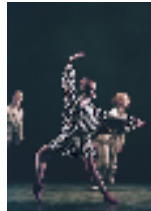
ビントレーの「ペンギン・カフェ」

2010年10月27日～11月3日 オペラ劇場

同時上演

balan sin の「シンフォニー・イン・C」

フォーキン の「火の鳥」



「ダイナミック・ダンス」 2011年3月19日～27日 中劇場

balan sin の「コンチェルト・バロツコ」

ビントレーの「テイク・ファイブ」

サーブの「イン・ジ・アッパールーム」

左から▲「コンチェルト・バロツコ」 photo by Andrew Ross ▲「テイク・ファイブ」 photo by Bill Cooper ▲「イン・ジ・アッパールーム」 photo by Bill Cooper

Answer② クラシック～ジャズ～現代音楽-バレエの持つ多様性を提供する

まず第一にお客様に心から楽しんでいただきたい。バレエはエンターテインメントなのです
ステージと客席が一体となるようなエキサイティングな舞台を上演していきたい思います

～ David Bintrey

ビントレーはステージと客席が一体となるようなエキサイティングな公演を目指したいと言っています。
「日本のお客様は、静かに真面目に舞台を鑑賞していただきます。国民性でもあるのですが、これが英国ですと、舞台袖にいても、ありていに言えば騒々しいくらいの客席の様子—お客様の話の内容までがはっきりと聞こえたりします。バレエはまず、ものすごく楽しいエンターテインメントであることを日本のお客様に知っていただきたいと思います。たとえば開幕公演の「ペンギン・カフェ」は、ペンギンやシマウマなどの動物の着ぐるみを着てダンサーたちが踊りますし、内容的にも楽しい作品ですので英国では子どもたちにも大人気の作品です。環境問題を扱ってはいますが、決してお説教くさいステージではありません。あるいは「イン・ジ・アッパールーム」はサープの最高傑作とも言われていますが、この作品が上演時には、必ず客席から大歓声が沸きあがり、拍手喝采となる作品です。また「テイク・ファイブ」は僕が振付けた作品ですが、この音楽は世界的に有名なジャズ界の巨匠デイヴ・ブルーベックに捧げたもので、彼のアルバムの曲を使用しています。お客様も客席でスウィングしながら、心底ステージを楽しんでいただきます。どうぞ劇場で存分にエネルギーを得てください」

デヴィッド・ Bintレーのこれまでの軌跡

「Welcome to the Penguin café」(バーミンガム・ロイヤルバレエ発行)より

1. 幼少期～ロイヤルバレエ学校時代まで 1957－1974

デヴィッド・ Bintレーは 1957 年にイギリス北部のハダーズフィールドで生まれた。

両親とも音楽教師で、熱心なジャズ奏者だった父は息子に幼少時からジャズの名盤に触れさせた。Bintレーはダンスに興味を持つようになり、すべてをやってみたいと言ったため、10 歳から地元でジャズ・ダンス、タップ・ダンス、民族舞踊、キャラクター・ダンスのレッスンを受けた。しかし 1972 年からは、ヒッパーホルムのドロシー・ステイーヴンズ・スクールでバレエに専念する。2 年後、弱冠 16 歳で彼は最初のバレエを振付け、イーゴリ・ストラヴィンスキーの 1918 年の演劇音楽「兵士の物語」を舞台化する。

1974 年、彼はロイヤルバレエ・アップパー・スクールに入学し、バレエの訓練を受けつつ振付も続け、2 年目には「美しく適切なこと」でアーシュラ・モアトン振付コンクールで優勝する。卒業の年には「コッペリア」のコッペリウス博士を踊り、類まれなキャラクター・ダンサーという評判を確立し始めた。彼はロイヤルバレエの創立者であり大物であるニネット・ド・ヴァロワからこの役（他に「ジョブ」のサタン役も）の指導を受けている。「マダム」として知られるド・ヴァロワは、イギリスのバレエ界のダンサーや振付家を数多く教え、数世代に渡って影響を与えた敬服すべき女性である。当時のロイヤル・バレエ団の芸術監督、ケネス・マクミランも彼の振付の才能を認めていた。

2. 最初のチャンス 1976－1978

1976 年、彼はバレエ学校を卒業しサドラーズ・ウェルズ・ロイヤルバレエにコール・ド・バレエとして入団する。好調なスタートを切り、2 年目でフレデリック・アシュトン振付「リーズの結婚」の主要な役であるシモーヌ役を踊り、一躍その名を知られることとなった。その 2 年後、彼は初版の「テイク・ファイブ」を初演する。これはデイヴ・ブルーベックの音楽に振付けたジャズ風の作品で、見た者にも踊った者にも愛情をこめて記憶されている作品である。

サドラーズ・ウェルズで Bintレーの芸術監督だったピーター・ライトは、この若いダンサーに振付を奨励し、1978 年に最初の大きなチャンスを与えた。Bintレーはサドラーズ・ウェルズ・ロイヤルバレエのために「アウトサイダー」を創作した。この作品には、豊かな創意と登場人物の洞察、鋭い演劇的センス、並々ならぬ詳細に渡る音楽的知識がすでに見て取れた。使われた音楽は、ほとんど知られていないチェコの作曲家ヨゼフ・ボハッチのものだった。これらの資質全てがやがて彼の作品に太鼓判を押すものとなった。

★「テイク・ファイブ」: 2006 年のニューバージョンが
新国立劇場で 2011 年 3 月上演予定



「テイク・ファイブ」



Photo by Bill Cooper Bill

3. 多くの成功を掌中にした若きビントレー 1979-1986

その後の5年間は多くの成功に恵まれる。ニネット・ド・ヴァロワの「チェック・メイト」の赤のキングの演技で賞賛され、「諺の草地」(1979年)、「ナイト・ムーブズ」(1981年)を含むサドラーズ・ウェルズ・ロイヤルバレエのためのいくつかの作品と、初の全幕物語バレエ「トゥオネラの白鳥」(1982年)で成功を収めた。その他に踊った役はド・ヴァロワの「放蕩者のなりゆき」の水夫、ジョン・クランコ振付「じゃじゃ馬ならし」のグレミオなどがある。1983年はとりわけ活躍した年となった。英国ロイヤルバレエのために作品(「コンソート・レッスンズ」)を振付けたばかりでなく、彼の作品「コロス」がイヴニング・スタンダード賞を獲得し、26歳にしてサドラーズ・ウェルズ・ロイヤルバレエのカンパニー・コレオグラファーに任命されたのである。この成功は翌年も続く。ビントレーは3つの振付賞に加え、ミハイル・フォーキンの「ペトルーシュカ」のタイトル・ロールを踊ってオリヴィエ賞を受賞、計4つもの賞を受賞した。

そして彼は、1985年にエジプトの神に想を得た抽象バレエ「ホルスの息子たち」を、1986年に英国ロイヤルバレエのためにスピード感のある「ガラントリーズ」を、そして同じく1986年にサドラーズ・ウェルズ・ロイヤルバレエのために全幕作品「雪の女王」(ハンス・クリスチャン・アンデルセンによる同名の童話に基づく)を創作した。その年は英国ロイヤルバレエのレジデント・コレオグラファーに任じられた。

4. 英国の伝統を受け継ぐビントレーの振付

今ではその演劇的な全幕作品でよく知られていることであるが、デヴィッド・ビントレーは、英国の豊かな演劇的遺産に影響を受けた物語バレエという英国の伝統を明らかに受け継いでいる。この思想を持つイギリス的振付けの流派は、ド・ヴァロワ、アシュトン、マクミランによって扇動され、普及した。英国ではバレエは頻繁に物語の一部として、ストーリーと感情を伝え、登場人物を掘り下げるために使われた。これとは別の思想の流派はアメリカのジョージ・バランシンがその典型とされるが、物語や舞台装置までもある程度不要とし、抽象的な作品が好まれた。



▲2010年5月新国立劇場公演「ガラントリーズ」

撮影：瀬戸秀美

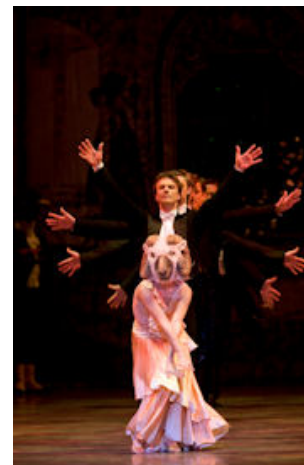
5. 最大の成功作品、人気作品が次々と生み出される 1987ー

この後の数年間に、ビントレーの最大の成功作が生まれた。名人芸を見せ付ける「アレグリ・ディヴェルシ」(1987年)に続く作品は彼の最大の人気作のひとつ「ペンギン・カフェ」(1988年)、そしてイギリス北部出身の靴職人に関するコメディ・バレエ「ホブソンの選択」は大きな話題となった。「マダムのためにー『イギリスの』バレエ」と副題がつけられたこのバレエは、物語バレエという偉大な英国の伝統への捧げものであった。「ホブソンの選択」の初演は、20年以上前に初演されたフレデリック・アシュトンの「リーズの結婚」以来となる大喝采をロイヤル・オペラ・ハウスにもたらした。

その後は1990年「惑星」、1991年「シラノ」(ともに英国ロイヤルバレエ)と、成功度のやや低い作品が続いた。しかしながら、1993年のバーミンガム・ロイヤルバレエの「シルヴィア」と同年高い評価を得た「墓」は、彼がますます充実していることを証明した。「墓」は、1988年に亡くなった故フレデリック・アシュトンを偲んで創作した作品である。

6. ロイヤルバレエを離れて海外へ

ロイヤルバレエを離れたビントレーは、続く数年間に海外で仕事をする機会をつかむ。世界中のバレエ団のために振付けたが、その中にはミュンヘン・バレエの「コンプリート・コンサート」(1994年)、シュツットガルト・バレエのために振付けた辛らつながら大成功の「エドワード2世」(1995年)、サンフランシスコ・バレエの3作品などがある。そのひとつが「ザ・ダンス・ハウス」(1994年)である。近年亡くなった友人と同僚を偲んで創作され、別の友人の芸術家ロバート・ハインデルのデザインによる装置と衣装を使ったこの作品は、個人的な感情のこもった作品である。



▲「ペンギン・カフェ」より

Photo by Bill Cooper



photo by Rpy Smiljanic

★「ペンギン・カフェ」: 2010年10月新国立劇場開幕公演

記念すべきビントレー新芸術監督の最初のシーズンは、彼の最大の人気作品「ペンギン・カフェ」で幕を開ける。日本での公演名は「ペンギン・カフェ」としているが、英題は「'Still Life' at the Penguin Café」で、'Still Life'つまり静物画の中だけではこれらの稀少動物が見られなくならないように、というビントレーの思いが込められている。20年以上前に初演された作品ながら環境問題という非常に今日的なテーマをビントレー独特のユーモア感覚とエンターテインメント性たっぷりの展開で見せる大傑作。英国では子供たちにも大人気の作品でもある

7. 果敢な一歩 1990 -

1990年、ピーター・ライトの指導の下、サドラーズ・ウェルズ・ロイヤルバレエはロンドンを去るという果敢な一歩を踏み出した。バレエ団はバーミンガムに拠を構え、バーミンガム・ロイヤルバレエとなった。その5年後、ピーター・ライトは引退し、デヴィッド・ビントレーが芸術監督の座を引き継ぐべく招かれ、彼は今日もその任にある。新しいバレエ団のために彼が最初に作った作品は、カール・オルフの有名な曲に振付けた「ポップな」バレエ、「カルミナ・ブラーナ」である。次は1996年の「遙か群集を離れて」であるが、これは「ホブソンの選択」の作曲家ポール・リードの曲に振付けた全幕の物語バレエである。

監督という新しい役割に慣れるにつれて、違った角度からバレエにアプローチすることによって一連の成功もついてくる。デューク・エリントンの音楽によるウィットのきいたジャズ・バレエ（「くるみ割り人形のキャンディ」(1996年)、「シェークスピア組曲」(1996年)、深い精神性の「奇跡のヴェール」(1998年)、そして記念碑的2部建ての叙事詩「アーサー王」(第1部2000年、第2部2002年)を創作した。アーサー王伝説に基づいたこの2夜に及ぶバレエは、魔法使い、騎士、愛と裏切りの壮大な物語が4時間のスリリングなダンスの中に凝縮されている。また、「四季 (The Seasons)」(2001年)、「コンサート・ファンタジー」(2002年)、「四季 (Les Saisons)」

(ロイヤルバレエ 2003年)などの抽象バレエと、ファミリー向けの新しい童話バレエ「美女と野獣」(2003年)を振付けた。さらに2つのジャズ・バレエが続く。デューク・エリントンへのオマージュであるが、音楽はジャズ作曲家でバンド・リーダーのコリン・タウンズによる「オルフェウス組曲」(2004年)、そして彼の初期の作品を完全に新しいバージョンにした「テイク・ファイブ」(2006年)。10年前の「くるみ割り人形のキャンディ」創作時当初から考えていた、ジャズ3部作がこれで完成を見る。

8. 新しい役割 2001 -

ビントレーは2001年のバースデー・オーナーズ・リストでCBEを授与された。現在彼のバレエは海外で定期的に上演されている。2005年、彼は「カルミナ・ブラーナ」を上演するために日本の新国立劇場バレエ団に招かれた。その大成功により、翌年「アラジン」の創作を委嘱されたばかりでなく、この羽が生えたばかりのバレエ団の芸術参与の地位を提示された。彼は、2010年にはバーミンガムでの責務と平行して、新国立劇場の舞踊芸術監督となる。

ピーター・ライトから手綱を引き継いだビントレーは、バーミンガム・ロイヤルバレエを若く活気ある才能に満ちた世界的なバレエ団へと育て続けている。バレエ団は、幅広い作品を上演しており、大成功を博しているピーター・ライト版を多く含むクラシック作品、マクミラン、アシュトン、クランコ、ド・ヴァロワという英国の遺産的作品、そしてバランシン、ファン＝マーネンなどの20世紀の名作と、新作の絶え間ない注入がある。彼はスタントン・ウェルチ、ライラ・ヨーク、オリヴァー・ヒンドル、キム・ブランドストラップ、マイケル・コーダー、ギャリー・スチュワート、バーミンガム・ロイヤル・バレエの新しいメンバーに新作を委嘱している。自身が創作した15以上の作品を含めると、バーミンガム・ロイヤルバレエは英国有数の創造的なバレエ団といえる。2010年、バーミンガム・ロイヤルバレエは、バーミンガム・ヒッポドロームを新本拠地としてめでたく20周年を迎えるが、その4分の3はデヴィッド・ビントレーの敏腕に支えられてきたことになる。

ビントレー作品の特徴

ビントレー作品の中でも唯一「ペンギン・カフェ」は、スタイルと内容両方の観点から、様々な意味で他と明確に区別してみることができる。ビントレー自身がこの作品を「変わった作品。それ以前にも以後にも私が作ったものとは違っている」と説明する。この作品が作られたのは、生態系と環境の問題が政治的課題として高い関心を集めた10年間の終わりのことで、当時の話題性とわかりやすさにおいて出色であったことから、この作品はたちまち観客に受け入れられた。

1976年にビントレーはサドラーズ・ウェルズ・ロイヤルバレエ（現バーミンガム・ロイヤルバレエ）に入団した。ここで彼は師と仰ぐニネット・ド・ヴァロワに指導を受け、アシュトン、マクミラン、バランシーン、ブティパといった振付家たちの作品を踊ってそのテクニックを吸収しつつ、自ら類まれな才能に恵まれたキャラクター・ダンサーという評判を形成する。彼のペトルーシュカは特にその世代の出色の演技と見なされている。

「誰が見ても、ビントレーはニジンスキーが持っていたものを持っている。それは、演じている役柄が何であれ、自分の体形をそれにぴったり合うように変化させられる能力である。」 ジャン・パリー、1984年

クレメント・クリスプは、こうした資質は彼の「自分が演じるステップの潜在力を理解する振付家の能力」から来るものだという（1981年）。意外なことではないが、この役作りの才能は彼の振付作品の中に顕著に現れている。彼は例外なく非常に個性的なキャラクターを振付けているが、どのステップと動きがその個性を最も鮮明に表すことができるかを直感的に知っている。この技は「ペンギン・カフェ」の動物たちの、それぞれ際立った性格描写にはっきりと見て取れる。

ロイヤルバレエのレパトリーのクラシック作品に触れたことで、ビントレーはバレエ団の伝統と遺産に対する深い敬意を徐々に身につけること

ととなった。特にその演劇性と、物語を重視し、アイデアを表現する革新的な言語を見つけことに価値を置き、舞踊言語でストーリーを語るという点において。それと同等に、彼は実験し挑戦し観客を楽しませたいという欲望を持っており、その作品にふさわしいと感じた舞踊形式やスタイルを何でも取り入れる。コックスは彼を次のように評している；

「彼の周りにある世界が提供するあらゆるものを吸収して自分のものにしてきた、クラシックに厳格に基礎を置いた振付家」

コックス、et al 1988年

プロの振付家としてのビントレーの最初の作品「アウトサイダー」（1978年）は、劇的なプロット、登場人物の鮮明な性格描写、そしてあまり知られていない音楽という、ビントレーの強い好みに端を発して成立したものである。その後彼は、作品の中で滑稽、悲劇的、叙情的、強健と、様々なムードを並べることに取り組む選択をする。1988年の「ペンギン・カフェ」で非常に好評を博した後、ビントレーは初のロマンティック・コメディを振付ける。おそらくこれまでの作品の中で最も恒久的な成功作であろう、全幕ものの「ホブソンの選択」である。1980年代には、「コンソート・レッスンズ」（1983年）、「アレグリ・ディヴェルシ」（1987年）などで純粋な舞踊の領域にも少しずつ入っていく。しかし、彼の作品の多くは「雪の女王」（1986年）、「シルヴィア」（1993/2009年）、「遙か群集を離れて」（1996年）などのように、彼が好む劇的な物語というジャンルに入るものである。彼は、観客に「こうだ」と押し付けたり説教したりするのではなく、演劇的な言語と神秘的な能力でそれとなくほのめかすには何がうまくいくか、非常に確かなセンスを持っている。例えば彼は「森の花」（1985年）では、わざわざ明示的に何かを提示することなく、戦争、愛国心、帝国の滅亡という問題に取り組んだ

それは絶滅というテーマを扱った時にも見られた手腕である。

ビントレーは、バレエのためのインスピレーションを純粋音楽から得ることがよくあり、彼の作品は音楽にぴったりと寄り添っている。彼はそのバレエに独自のものとなるような新しいものを創るために、作曲家と共同で作業することを好む。彼の好みは多岐に渡っており（彼はクラシックはもちろん、ジャズ、スイング、ビッグ・バンド・ミュージックの大ファンである）、異なる舞踊スタイルに合わせて異なるスタイル、異なる時代の音楽を混ぜ合わせる創意に非常に富んでいる。生き生きとしてドラマティックな彼の「カルミナ・ブラーナ」の音楽は、ニコラス・ドロムグールに「豪華にポップ」と評され、また極めて伝統的な「くるみ割り人形」にデューク・エリントンによるこの音楽のジャズ・バージョンを使って革命を起こすことに成功した。「くるみ割り人形のキャンディ」は、ジャズとクラシックのスタイルをアメリカ・ミュージカルの自己顕示癖と混ぜ合わせることでビントレーが発見した新鮮な比喩的表現によって、非常に独特な作品と見なされている。一方「ペンギン・カフェ」は、様々な音楽的スタイルの幅に合わせながらもそれぞれのエッセンスと雰囲気을きちんと保持し、オリジナル性のある振付を創造する彼の才能を示すもう一つの好例である。

ビントレーは振付家として感銘に値する幅を持ち、また完全にコンテンポラリー・バレエとはいえないけれども現代の香りがする独特のスタイルを持っている。彼はしばしば「同じバレエを 50 回も作ることは興味がない」と言っており、新しい多様な観客を呼び込めるようなオリジナルなアイデアやアプローチを常に探し求めている。彼はバーミンガム・ロイヤルバレエの監督として作品を生み出し続ける。それは、彼自身の言葉で形容するならば『『クラシック』と、あまりに流行に左右されるようになった『コンテンポラリー』のせまい定義を超越した作品』である。

ビントレー振付のスタイル

多作で多様なデヴィッド・ビントレーの後には、「変身」などの力強い舞踊劇から、「ガラントゥリーズ」のような叙情的な音楽の舞踊化まで、非常に多岐に渡るバレエ作品の長いリストが続いている。しかしながら、これらの作品から彼の振付スタイルを典型づけるといえる、いくつかの頻発する特徴を引き出すことは可能である。

ビントレーには強い演劇的センスと、主題を開拓し、論議を巻き起こす問題に明示や「説教」なしに取り組む能力がある。これを彼は、工夫に富んだ、しばしば超現実的な、想像的表現という形で成し遂げる。（絶滅したオオウミガラスをカフェのウェ이터として描くという、「ペンギン・カフェ」の中心となっている思いつきは、その最たる例だ。）筋書きのない作品でも、少なくとも様式的な主題を持っており、作品に個々の味付けと独自性を与えている。

ビントレーは極めて演劇的なエンターテイナーである。彼の振付にはオリジナルでクレバーな動きのウィットが詰まっており、踊りと劇場に対する感化性の情熱を伝える。自身が優秀なキャラクター・ダンサーだった経歴を持つビントレーは、アイロニーとユーモアを駆使してとりわけ鮮明で詳細な人物描写を作り上げる。

彼はしばしばバレエ作品のインスピレーションを純粋音楽に見出し、概して他の振付家が使ったことのある音楽を避ける。例えば、デューク・エリントンの「ジャズ＝くるみ割り人形」は「くるみ割り人形のキャンディ」の出発点であり、音楽の中の意外なリズムやメロディーなどの変わったところが、ビントレーの進取の気概に富む振付的反応を刺激した。彼は、作曲家との共同的な関係の中で一から仕事を始めることを好んでおり、音楽と動きの有機的な関係の達成を求めて、新しい音楽の作曲を委嘱するという冒険をすることもしばしばである。ビントレーは作品のテーマを注意深く研究し、複数のもの（映画、絵、本、神話、物語）から同時にアイデアを引き出してその融合から彼のイメージーションを膨らませることもある。

ビントレーは、作品のデザインをテーマと動きにきわめて密接に結びつけることを好み、初めから自分のバレエをどのように見せたいか、非常に確固としたアイデアを持っている。まだ何らの動きも作っていない前に、彼が頭の中で生み出す数々の絵から、まずデザイナー達と衣装と装置のデザインについて話し合いが行われる。このアプローチは本来、バーミンガム・ロイヤルバレエのような大きな組織との仕事の事業計画に関係するものである。

「作品を作るときに贅沢できて『衣装をデザインして！』と言うだけで良い、なんてことは一度もありません。最初にすべてのデザインの特徴を注意深く熟考して、結合と全体の意識を持ちつつ、テーマや他の要素と緊密に織り合わせるのです。すべてが完全に溶け合っていることは、私にとって不可欠なのです。」

ビントレーは、彼の前任者であるピーター・ライトのクラシックの伝統に健全な敬意を持ち続けているが、それは革新的・実験的であろうとする決意を通して成立しているものであり、明らかに「イギリス的」でありながらも明確に彼特有のものとわかるスタイルに結実している。彼は特にクラシック作品を全く現代的な手法で改定することに興味を持っており、特定のムードや意味、効果を作り出すために、ひとつの作品の中でジャズからソシアル・ダンス、バレエまで様々な舞踊様式を折衷的に並べて使うこともしばしばある。彼の振付は、その特徴として流暢であり、入り組んだフットワークのめまいがするような複雑さと、空間の中のライン、形、パターンに対する強い意図によって、ディテールとアクションがみっちり詰まっている。

「ペンギン・カフェ」のアップ・ビートで気まぐれなムード、挿話的な構造は、ビントレーの振付に「くるみ割り人形のキャンディ」以来再現された特徴である。「くるみ割り人形のキャンディ」は、同様に生き生きとしてカラフルでおめでたいムードであり、しゃれの効いたタイトルは音楽と振付の「組曲」的な構造に拠っている。そしてその1曲1曲は、それぞれ異なった新しい個性を描写している。